

小さな命を看取った経験から

大田市立北三瓶中学校 3年
森山 太陽（もりやま たいよう）

「ロッタ！ロッタ！」母が呼びかけました。我が家の愛犬ロッタの意識は朦朧（もうろう）としていて、僕たちはロッタの最後の時が近づいていることを知りました。

中学一年の夏に、我が家に新たな仲間が来ました。ダックスフンドのロッタです。前の飼い主が飼えなくなってしまったので、僕の家で引き取ることになりました。散歩したり庭で遊んだり、にぎやかな毎日でした。

しかし、中学一年生の冬、僕たちにとって悲しい出来事が起こりました。ロッタの死です。その日はとても寒く、異変に気づいた母が、ロッタをストーブの前に連れて行き、一生懸命暖めていました。僕たちは、呼びかけたり、体をさすったりして、ロッタの命をつなぎ止めようと必死でした。

ロッタが最後まで僕たちを信頼してくれていたことが分かる出来事がありました。最後に「ロッタ！ロッタ！」と呼んだとき、ロッタが口を大きく二回開けたのです。そして、静かに天国へ行ってしまいました。ロッタが口を開けて伝えようとしていたことは、「いままでありがとう」というメッセージだと思いました。僕たちがロッタをかわいがることで、ロッタと僕たちは一本の糸でつながっていたのだと思いました。

ロッタを看取った経験は、息を引き取る瞬間の貴重な時間を共有すること、一緒に過ごすことの大切さを教えてくれました。生き物には命があること、その命には限りがあり、必ず死ぬときが来るということも実感しました。でも、飼い主が飼えなくなった後の時間を、僕たちと過ごすことができ、ロッタが命を全うす

ることができたことは嬉しかったです。

僕たちの中学校は、毎年七月に介護老人福祉施設へ訪問に行きます。苑長さんへの質問タイムでは、後輩がこんな質問をしました。

「高齢の方と生活をしていると、亡くなられる瞬間に立ち会うことがあると思います。そのときはどんな気持ちですか。」すると苑長さんは、「亡くなられる瞬間のその場に立ち合わせていただくことは、とても尊く、ありがたいことです。」と答えられました。「ありがたい」という言葉に少し驚きましたが、ロッタを看取った時の気持ちを思い出しました。

「これまで一緒に過ごしてくれてありがとう。」「いろいろなことを教えてくれてありがとう。」という気持ちは共通していました。命の最後に立ち会う、命を看取るということは、尊くてありがたいことなのだと思います。しかし、ありがたい反面、僕にとって、看取りの経験は、とても悲しいことでもありました。

僕たちが訪問した施設では、入所者の方一人ひとりを大切にされていました。苑長さんは「相手がいるから仕事ができる。利用者さんの気持ちを考え、その人を理解することが大切。出会った瞬間を大事にし、目を合わせて会話をすることが大切。」と話してくださいました。体が弱くなっても、病気になっても、その人らしい生活が送れるように、できないことを職員さんがサポートし、人として大切にされていることを実感しました。

僕たちが食事介助のお手伝いをした時には、職員さんから細かく指導をしていただきました。口元までスプーンをもっていくこと。相手の方が咀嚼（そしゃく）をしてきちんと飲み込まれてから次のご飯をもっていくこと。次に何を食べたいのか、相手に聞くこと。大きな声ではっきりと話し、耳が不自由な方にも聞こえるようにすること。人それぞれの個性に合わせて、その人のペースや意志を大切にしておられることが分かりました。

僕は、相手の表情を見て、どういうやり方なら相手が笑顔になってくださるか考えました。だから僕の介助によって、ご飯を食べてくださり、相手が笑顔になられたのはとても嬉しいことで

した。食事の時間も一緒に過ごすことで相手との距離が近くなったように感じました。自分の手で食べることはできなくなっても、誰かの助けによって食事ができること。そして食べる喜びを感じてもらえることは、僕にとっても嬉しいことでした。

今、「命を大切に」という当たり前のことが難しくなっています。また、高齢者への虐待や介護者不足の問題で、人が最後までその人らしく生きることが難しい現状もあります。

ロッタと過ごした時間は、僕たちとロッタの心の絆を強くしてくれました。介護老人福祉施設での体験からは「相手が喜んでくれると自分も嬉しい。」ということに気づくことができました。最後の時まで安心してその人らしく生きるためには、周りの人たちとのつながりが大切だと考えます。

僕はこれからも、家族や友達、地域の方々とのつながりを大切にしていけます。そしていろいろな人が共存していく社会を築くことができるよう、体験から学んでいきたいです。